

鳴門教育大学 教職大学院に学ぶ

現在、将来にわたり、求められる教員像を探求しつつ、教育成果の検証を重ねながら、専門職業人としての教員を養成すること。それが鳴門教育大学・教職大学院のミッションです。

》わたしの賞はイカのどんぶり

竹村さんが、「教員になりたい」と思ったきっかけは、小学校1年生の時の担任の先生との出会いです。先生は、いつも笑顔で、ダンスが好きで、体育の授業は、「ポップコーンみたいにはじけてみよう」、「ちょうちょになってとんでみよう」という身体ほぐしと心ほぐしから始まりました。竹村さんは、実技は得意ではありませんでしたが、楽しい体育の授業は大好きだったそうです。

児童詩コンクールの表彰式で、先の受賞者に続き、自分の名前が呼ばれた後に、校長先生が「以下同文」



竹村 和美 先生

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース修了



と言われたのを「イカのどんぶり」と、聞き間違えた1年生の竹村さんは、「わたしがもらった賞は、イカのどんぶりだよ」、とお母さんに伝えました。そのお話が、担任に伝わり、学級通信で温かいユーモアのあるエピソードとして発信されました。

どんなことでも子どもの目線に立って考え、認めてくれた女性教師は、教職を選んだ竹村さんの学級経営に大きな影響を与えました。それは、子どものつぶやきを大切にする教員と、失敗しても思ったことが言える子どもたちのいる学級づくりを目指すことでした。

努力の甲斐あって、教師として、今まで楽しい学級経営を展開してきたのですが、これからは、経験知のみに頼るのではなく、学校学級経営の理論を学び、若い教師に伝えることで、一緒に学校づくりをしたいと思い、鳴門教育大学教職大学院に入学しました。

CASE 7 : 子どものつぶやきを大切に



自分大好き・友だち大好き・学校大好き

実践に理論が裏打ちされる感覚

大学生の頃の学びは、専門用語であふれる知識を注入し、教員採用試験のための勉強に明け暮れるという印象でした。ところが、教職大学院での授業は、学ぶこと

がこんなに楽しいものかと思うものでした。自分が実践したことと、大学教員が指導する内容が符合しているのです。実践に理論が裏打ちされる感覚です。「学校の根っこの課題の把握」や「ユニバーサルデザインをふまえた環境整備」など納得のいくものが多くありました。

竹村先生の研究概要

組織で取り組む潤いのある学級・学校づくり

Research 期

学校アセスメント

○子どもが抱える教育課題の可視化



子ども

- 与えられた課題にまじめに取り組む。
- 異学年と一緒に外で元気に遊ぶ。
- そうじをがんばる。
- ▲受動的な学びの姿勢。
- ▲家庭環境の格差による生活、学習態度が不安定。
- ▲他者意識の不足。

教職員

- まじめで熱心。
- 指導力がある。
- ▲子どもに考えさせ、自己決定し活動させる場の不足。
- ▲個業化傾向。

○よさ ▲課題

Plan 期

実践に向けた組織的教育意思形成

- 学校課題解決に向けた具体的な取組を実施するために、組織体制を確認した。
- 各プロジェクトの具体的な取組を図式化し展開について共通理解を図った。



》 関わり合い伝え合う

子どもたちと教員が潤いのある人間関係の中で学校生活を送りたい。そのためには、子どもたちと教員が「関わり合い伝え合う」活動が必要だと考えるようになりました。

教職大学院2年の実習では、実習校の教員全員で、人を大切にして聴くことを徹底して取り組みました。そして、子どもたちが優しくがんばることができるように、しっかり教えて、考えさせて、価値づけていきました。

関わり合って伝え合う子どもたちの姿が、授業中、そうじの時間、休み時間など、いろいろな場面で見られるようになりました。

毎月14日は、「いいよの日」を設定し、その前後1週間は、友だちや先生に「ありがとう」のメッセージや「そのことはいいことだよ」という友だちへの気持ちをカードに記し、一人ひとりの名前が書かれたポ

ケットに入れていきます。給食の時間には、教員が校内放送でカードの紹介をします。喜びと笑顔が教室中に広がり、他の人からの承認が、自分への信頼を高め、学習意欲や規範意識の向上につながりました。

》 笑顔が日本一の学校に

認められることにより、子どもたちの表情が豊かになりました。笑顔が増えました。それは、家族や担任も実感していることでした。教職員も笑顔が増えてきました。相手を認めることは、何より自分自身が幸せになることなのです。

これからも、ともに生活する子どもたちや教職員に「認め合う」場を提供していきたい。そして、「小学校1年生担任として教員生活を終わりたい」と締めくくった竹村さんには、小学1年生の子ども時代に思いをめぐらすとともに、将来を見つめる表情を見ることができました。

子どものがんばりと優しさを引き出す「効果のある指導」の組織的展開

Do 期

教育改善に向けた具体的な取組

(主体的な学び)	<p>学びづくり</p> <p>人を大切にして聴く</p>  <p>関わりある授業</p>	勇気づけのボイスシャワー
(規範意識と仲間意識)	<p>生活づくり</p> <p>そろったスリッパ</p>  <p>心の通うあいさつ 気持ちのよいトイレ</p>	
(自治的な活動)	<p>活動づくり</p> <p>お手伝い大作戦</p>  <p>毎月14日を「いいよの日」として、友だちや先生に「ありがとう」「いいよ」を伝える。</p> 	

Check・Action 期

次年度に向けての改善案

○アンケート結果をフィードバックし、次年度に向けて組織的改善を図った。



○身近な他者からの承認は自分への信頼を高める。そしてそれが学習意欲や生活規範へつながっていく。実践してきた各プロジェクトの取組を継続し、さらに「日本一笑顔いっぱい学校」を目指していきたい。

「あの先生がいないと困る！」

そんな先生だからこそ鳴教の教職大学院へ

教師力UP

頼れる、頼られる先生は、実践を省察し、学び続ける意欲を持ち続けているものです。より高い“教師力”を身に付けることをめざすなら、理論と実践の融合が特長の教職大学院が最適です。

学校力UP

指導教員は学生と共に勤務校を訪ね、1年次の学校課題アセスメント、2年次のフィールドワークを通じて課題解決を目指します。在学中も、勤務校にとって、大きなサポートが得られるのです。

地域力UP

教職大学院が目指すのは、リーダー教員の育成です。勤務校はもとより、地域の教育界に資する、学校や地域で指導力を発揮できる人材を育成するには、教職大学院を活用ください。



「求められる教師力・学校力」の向上

高知県土佐市教育委員会 教育長 武森 正憲

本市においても学校教育における今日的課題は都市部と同様に多様化、複雑化しています。ここ数年では、不登校問題や学力問題が再浮上してきました。このような状況に教職員が高度な専門性と実践的な指導力をもって迅速に対応することが重要であり、鳴門教育大学教職大学院における「理論と実践」の融合による学びに期待を寄せ、その成果が勤務校において還元されることを楽しみにしています。また、教員の大量退職に伴い、指導力・学校

力の低下が危惧される状況にあって、学校においては、即戦力となれる人材の採用・育成が強く望まれています。教職大学院におけるスクールリーダーの養成機能は、学校全体の教師力を向上させることに結びつく重要な役割を担っていると認識しています。

今後も派遣教員等による連携を通し、教育課題に対応した教育環境づくりに尽力して参ります。



魅力ある学校づくりをめざして

高知県土佐市立北原小学校長 川端 章祐

先を見通すことの難しい時代においては、生涯を通じ不断に学び・考え、予想外の事態を乗り越えながら自らの人生を切り開いていける人間を育成することが求められています。

このような中、竹村教諭が、大学院の実習生として、「組織で取り組む潤いのある学級経営」を実践課題として研究に取り組んできました。この学びの成果として、評価アンケートで「被受容感」「自己肯定感」、学習項目では「授業がわかる」において向上してきました。

また、「子どもに考えさせ、自己決定させる場の不足」について、意図的な自学、自治の場の設定がされ改善が見られてきましたし、ボイスシャワー等によりT-C間の信頼関係も構築されてきました。

今後は、このように育ち始めた芽を大切に育み、実りとしていくために更なる向上心を持って取り組んでいってくださることを願っています。

◆お問い合わせ

鳴門教育大学 教職大学院コラボレーションオフィス

電話：088-687-6598 ファクシミリ：088-687-6694 E-Mail：collabo@naruto-u.ac.jp

鳴門教育大学ホームページ <http://www.naruto-u.ac.jp/>



鳴門教職大学院の火

池田 勝久 さん
[浜松市立中ノ町小学校]

教職大学院1期生として、試行錯誤をしながら自分の目指すべき理想に向かって研究に没頭した2年間。それは私にとってかけがえのない時間でした。

私の専門である小学校英語を普及・発展させていくためには、現場での実践だけでなく、行政からの施策をいかに現場に浸透させていくのが大きな課題です。その課題克服のため、私の小・中学校での英語指導経験と教職大学院で研究したカリキュラムマネジメントとワークショップの理論を融合させた教員研修は、各所で多くの参加者から好評をいただいています。このような教員研修はこれまでに50回近く実施され、近隣の市町村だけではなく、埼玉、東京、愛知、大阪、高知からも研修依頼が来るようになりました。本年度は、教員免許状更新講座も担当させていただき、受講者の校種も幼稚園から高等学校まで広がりました。

教職大学院で学んだ「教育活動をマクロ的視点に立って把握し、最も効果的な教育活動を焦点化して実践する方法論」は、小学校英語だけでなく、様々な教育活動でも役立っています。今後も『洪庵のたいまつ』のように、鳴門教職大学院の火を全国に広めていくことが私の願いです。

(平成22年3月授業実践・カリキュラム開発コース修了)



学びを糧に歩み続ける

加茂 直子 さん
[徳島県教育委員会学校政策課 指導主事]

学校現場を離れ、教職大学院の一期生として入学した当初は、これからの学びに対する期待と不安が入り混じる日々でした。

しかし、大学での講義や「課題解決実習」、さらに先生方や校種を越えての仲間との出会いは、学校を組織として捉える広い視野を持つことの必要性や、教員として常に、知識・技術の刷新のために学び続けることの重要性を実感させてくれた、貴重な2年間となりました。

中でも、「課題解決実習」において、置籍校でファシリテートチームを作り、全教職員での共通理解のもと、課題の解決に向けて進めていった過程の中で、学校が組織として成長していくために必要な考え方や視点について学ぶことができました。

現在は、徳島県教育委員会学校政策課の指導主事として、教科担当指導主事としての役割はもとより、キャリア教育や消費者教育等を担当しています。

社会が急速に進展する中で、本県においては、「地方創生」に向けた取組が推進されています。

地域を担う人材の育成に向けて、国や県の動向を見極めながら、これからも様々な教育施策を展開していきたいと思っています。

(平成22年3月学校・学級経営コース修了)



協働する学校を目指して

三木 省二 さん
[高松市立木太小学校 教頭]

「学校経営」。教員生活でそんなことは全く考えていなかった私にとって、教職大学院での学びは大きな出会いでした。講義で紹介される全国の魅力的な学校の様子。そこで生き生きと働く先生方の姿。その理由が理論で示され、私は院で学ぶ「学校経営」にどんどんのめり込む思いでした。そして、ぜひ学校現場でも取り入れたいと思いました。

修了後、2年間で学んだことを置籍校で生かして学校経営や学年団経営に携わりました。協働意識の高い教職員の協力もあり、児童の実態から重点目標を定め、焦点化した実践を行うことができました。児童の成長とともに、仲間と協働して教育活動を行うことの楽しさや充実感を味わうことができました。

現任校でも、教職員の生の声や新たな教育課題から重点化すべき学校課題を探っています。また、これまで学校が伝統的に取り組んできているよさを生かしつつ、日々、期待感をもって漸進的に教育活動の改善に取り組んでいます。チームワーク抜群の教職員とともに、児童も先生も元気な学校づくりを目指しています。

(平成22年3月学校・学級経営コース修了)

～学び続ける修了生～



学び続けるきっかけ

浅井 隆宏 さん

〔愛媛県愛南町立御荘中学校〕

教職に就き15年が経過した頃、これまでの経験だけに頼って指導をしている自分がありました。教師としての学びを止めていたこと、学び続けることの大切さに気付かせてくれたのが、「教育の一番札所」教職大学院での学びでした。密度の濃いゼミ、各先生方の特徴ある講義や全国各地から集まった院生との対話を通して、自分自身を大きく成長させることができました。

在学中は、「学び合いによる授業改善」というテーマで、日々の授業改善や校内研修の改善に取り組みました。大学院修了後、置籍校に戻り、研修主任としてワークショップ型の校内研修を中心に課題解決に努めました。また、現在の勤務校に転任してからも研修主任として、教職大学院での学びを生かしながら、校内研修の充実に努めました。在学中に学んだワークショップ型の研修は、様々な場面で活用ができ、学校の組織力の向上につながっています。

教職大学院の基本理念「理論と実践の融合」は、今後も追い続けていくべきテーマです。そのためにも、私自身が学び続ける教師でありたいと強く思っています。

(平成24年3月授業実践・カリキュラム開発コース修了)



つながりを大切に

伊川 敬子 さん

〔鈴鹿市教育委員会事務局
教育指導課研究グループ長期研修員〕

鳴門教育大学で学んだ後、長期研修員として現在の部署に所属しています。主な仕事内容は、テーマに沿って国・県の動向や市内の小・中学校の実践を中心に調査研究を行い、教育現場に活かしていくことです。私は中学校教諭ですが、調査研究を進めるに当たり、幼稚園や小学校の実践を見たり、先生方と触れたりする機会をたくさんもち、学ぶことが多く、視野が広まったように思います。

また、昨年度は実習校の中学校区の合同研修の場で、院での研究について報告し、学んだことを小・中学校、園で共有、活用してもらう機会を得ました。院においても異校種の院生と共に学ぶ機会を得ましたが、改めて校種間の連携は大切であると感じました。

今年度、また新たなテーマについて調査研究を進めています。調査研究を進める中で、市内の学校での実践に加え、国の動向や他市、他県の実践等に学ぶ毎日です。

市の教育の課題は何か、それに対する手立ては何か等、学校・園に具体的な内容を伝えることができるよう、仲間と共に調査研究を進めていきたいと思えます。

(平成26年3月学校臨床実践コース修了)



元気の出る学校を支えたい

明神 通恭 さん

〔高知県教育委員会
高知県心の教育センター 指導主事〕

私は大学院卒業後、教育相談機関である高知県心の教育センターに配属され、指導主事として様々な方から相談を受けたり、校内研修の講師を勤めたりする毎日を過ごしています。業務において多様な教育課題と対峙する際に力となっているのが院での学びです。特に学校組織開発理論は自分の根幹となる概念としてあらゆる場面で判断の基準となっています。

この仕事で苦心しているのは、校内研修を通じて学校の内発的な改善力をどのように向上させるのかという点です。学校ごとに実態やニーズが異なる中で「学校課題の本質に迫る研修・自律的な教育改善力を向上させるための研修」を先生方と一緒に創り上げていくのは難しいことですが、とてもやりがいを感じています。そして研修を通じていろいろな学校の先生方と出会い、子どもたちの元気な姿を目の当たりにするたびに、主事としての責任と学びの必要性を痛感しています。

これからも学校を元気づける教育者になることを目指して、「人間到る処青山あり」という言葉を胸に理論と実践を深めていきたいと思えます。

(平成26年3月学校・学級経営コース修了)